# フィールド(現場)からの風 ⑮⑧

宮田守男

## 経済状況が激変する中で、継続可能な経営の在り方について考えてみませんか

10月下旬、長野市内で開催されたNPO信州地域フォーラムが企画した「女系3代・長野市SBC通り・フタキ薬局の50年」2代目二木鈴子さんが語る。の学習会に参加した。フタキ薬局は、御婆ちゃん、お母さん、娘が3代にわたり薬局を経営。付近には、大手チェーン店薬局が軒並みある中、2代目の二木鈴子さんの奮闘ぶりを聞き、街の商店のあり方を討議する内容だった。

年齢は四捨五入すると70歳と自己紹介。思わず聞き返すほど、若く見える容姿だ。一方的な話でなく、参加者の聞きたいことに答えていただく進行スタイル。何とか、老舗の経営を聞き出そうと、矢継ぎ早に質問をする参加者。

「時代と共に薬局のスタイルは変わってきたが、一貫してお店に足を運んでくださる方との対面を大切に」、「自分に合った漢方薬で体質改善して、心も身体も健康に」、「何となく体調が悪い、寝ても疲れが取れない、頭痛がする…、めまいがする…」

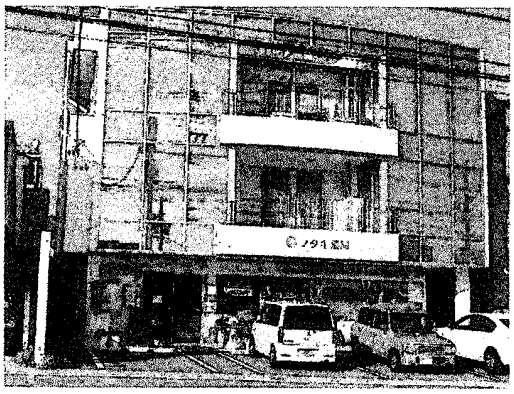
この身体が発しているサインを出した時に、我慢したり、ただ症状を抑えるのでなく、薬局を使って元気にする方法を見つけてほしい。と優しい物腰で答える二木さん。対面重視が、3代続いている原動力だと納得する。

しかし2012年に、6年制課程の卒業生を対象に新しい薬剤師国家試験が初めて実施され、合格しなければ薬剤師になれず、私立大学には、28もの薬学部が新設、総定員数が増加したため、将来的に薬剤師の余剰人員増が予想される。薬局を取り巻く環境も時代とともに変わり、現在の調剤・漢方相談・エステなどを展開する二木さんの、今後の経営手腕を注視したい。

現在厚生労働省が進める、健康情報拠点薬局（仮称）を巡る論議の中の、地域に根差した「かかりつけ薬局」構想も、「健康サポート薬局」へと、関係者の思惑もあり変更を余儀なくされている。もっと薬局を取り巻く状況を知りたく、薬剤師の深井良佑さんの、「なぜ、あなたの薬は効かないのか？薬剤師しか知らない薬の真実」の著書を読む。

薬とは何かの項目で、薬というものは本来、病気を根本から治すものではなく薬とは、病気の症状を抑える物質と理解したほうが良い。の内容から展開される著書の内容は、興味深いものだった。地域経済を考えるとき、色々な業種の話を聞く大切さを、改めて確認できた学習会でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・森上白馬村）



フタキ薬局。モダンな建物、将来を見据えた戦略が伝わってくる。